

# 言語意識から見た若者ことば使用の要因

太田 一郎・牧瀬 那生

キーワード：若者語，俗語，流行語，世代方言，言語意識

## 1. はじめに

この数年，10代後半の若者の行動が世間の注目を集める中，言語面でもいわゆる「若者ことば」と呼ばれる語形等が一部の若者の奇抜な日常行動と絡めて，いわば「見せ物」的にマスコミなどで取り上げられてきた。このようなとらえ方が皮相的であることはもちろん言うまでもないことだが，「若者ことば」のような流行語・俗語の類が言語理論においてどのような位置づけがなされるかについてはあまり議論されていないように思われる。流行語・俗語というラベルが貼られる要素は，新しく作られた形式であったり，古い形式の焼き直しによる新用法への拡張だったりすることが多いが，一時性の含意を帯びて多くの形式が現れては消える中で，いくつかの形式が存続し続けるのはなぜかという問題はあまり取り上げられていない。これは，たとえば「ら抜きことば」の広がる理由が可能動詞体系の整理という言語内的要因に求められるのとは異質の話である。ことばの体系との関連が比較的弱いと思われる俗語・流行語は，永瀬他（1995）のように，話者のパーソナリティ特性との関連から説明が試みられてきた。しかし，ある集団の中で，どのような形式が好まれ，採用されていくのかという問題と，言語形式の側の特性にはどのような関連が見られるのだろうか。本稿では，その一端を若者ことばに対する言語意識の中に見いだすことを試みる。

## 2. 考察の進め方と調査の概要

本稿では、若者ことばへの言語意識に関するアンケート調査の結果から若者ことば各語形・用法のイメージを描き出し、どのような要因がそれらの使用に影響を与えるかを探る。ひとくくりに若者ことばと言っても、その中には好まれるものと好まれないもの、使われるものと使われないものがある。これは単に好き嫌いという感情だけでは説明できないものであり、何らかの要因が関わっていると思われる。本稿では、まずコレスポネンス分析（CA）により言語項目間および評価項目間に内在する若者ことばの使用要因を拾い出し、次にその要因が若者ことばの使用を示すモデルとして妥当かどうかを重回帰分析により検証するという手順で考察を行う。なお、今回の分析に用いるデータは以下に述べる調査により収集したものである。

### 2.1 調査項目の概要と回答者の構成

調査は2000年7月と10月に、当時鹿児島県内居住で鹿児島市内の2つの4年制大学と1つの短期大学に通う18歳から24歳までの大学生を対象にアンケート形式で行い、179名（男性92名、女性87名）から有効な回答を得た。アンケートの内容は、（1）パーソナリティに関する設問、（2）行動・友人関係に関する設問、（3）電子メディア（携帯電話、インターネットの使用）に関する設問、（4）若者ことばの使用とイメージに関する設問から構成されているが、本稿では、このうち（4）の結果のみを使用する。なお、回答者の性別、出身地別の構成は以下の通り。

	男性	女性	合計
鹿児島県内出身	63	59	122
鹿児島県外出身	29	28	57
合計	92	87	179

表1 回答者の属性（人数）

## 2.2 「若者ことば」の選択

言語面の調査項目の拾い出しは、大学生たちがどのような言語表現を若者ことばと認識しているかを探ることから始め、以下の手順で行った。まず、150名の大学生に対し、予備調査として自由回答式で若者ことばと思う語形を記入させ、合計で169語形を得た。次に、これらの語形を1999年度に太田が鹿児島大学で担当した講義及び演習で行った同様の調査から得た語形と比較した。若者ことばの中にはすぐに廃語になるものも多いが、すでに廃語となったものを調査項目に選んでも意味がないので、前年から引き続き使用されていると思われるものを選ぶためである。<sup>1</sup> また、本調査の目的は若者ことばの使用に関わる要因を探ることなので、調査する語形・用法は認知度が高くかつある程度使用者がいることが見込めるものを選ぶ必要があった。そこで限られた使用者だけの特殊なものを避けるために、1999年と2000年版の『現代用語の基礎知識』を参照し、最終的に調査する語形を決定した。

予備調査で集めた語形の中には「テンマチ（天文館）」、「ジョる（ジョイフルに行く）」、「だからよ（あいづち）」、「わっせ（とても）」などの地域語的語形もいくつか見られたが、本調査のアンケート回答者たちには県外出身者も含まれるので、地域色の強い語形は含めないようにした。<sup>2</sup>

以上の手順を経て、予備調査で得た169語形のうち、99年調査で使用頻度が高かった37語形を取りだした。最終的には、最近ドラマなどでも耳にする「～ない？」という平板上昇調の確認要求の音調を加え、若者ことばとみなすことのできる合計38の特徴を調べることにした。そのうち、表2の20語については、その語形・用法に関する「知識（知っているかどうか）」と「使用（使用するかどうか）」のみをたずねた。この20語をグループIと呼ぶことにする。

<sup>1</sup> その意味では、一過性の流行語は含まれていないことになる。

<sup>2</sup> 「あっぱる」については、調査時には鹿児島的ではないと判断していたが、その後地域的なものの可能性があると思われることがわかったため、分析には含めていない。

語形・用法	意 味	語形・用法	意 味
あっぱる	あわてる, 焦る	はずい	恥ずかしい
イケメン	かっこいい男の人	バビった	すごく驚いた
おつ	お疲れさま	はまる	夢中になる
おっはー	おはよう	バリサン	携帯電話の電波の受信状態がよいこと
かぶる	言葉や行動が同じであること	ブッチする	さぼる, 約束をすっばかす
きしよい	気色悪い	へこむ	落ち込む
キレる	怒る	むずい	難しい
コピる	コピーする	よさげ	よさそうな雰囲気
タメ	同い歳	ワンギリ	携帯電話を1回鳴らして切ること
ちよつき	直接, 家に帰る	～入ってる	～の状態にある

表2 知識度・使用度を調査した語形（グループⅠ）

語形・用法	意 味	語形・用法	意 味
～的には	～としては	やるゼロ	やる気が全くない
～って感じ?	～のようだ, ～みたいだ	コクる	告白する
～みたいな	～のような	サムい	ギャグがつまらない
～とか	表現を和らげるための無意味なつけたし	オールする	一晩中起きていること
～系	～っぽい, ～のような感じであること	うざい	うざったい
～くない?	上昇調のイントネーション	きもい	気持ち悪い
パクる	盗む	超	とても, 非常に
はぶる	仲間はずれにする	オニ	とても, 非常に
ニケツ	自転車, バイクに2人乗りをすること	めっちゃ, めっちゃ	とても, 非常に

表3 知識度・使用度・言語意識を調査した語形（グループⅡ）

表3の18の語形・用法は、米川（1998）が若者ことばに認める特性（強調性、省略性、隠語性、感覚性、緩衝性）を表すものとして選んでいる。それぞれの形式が備えていると思われる特性は表4のとおりである。それぞれの語形はこれらの特性のうち少なくとも一つ以上を備えており、その意味では若者ことばの代表的形式であると言えるだろう。

	強調性	省略性	隠語性	感覚性	緩衝性
めちゃ	○	×	×	×	×
サムい	×	×	×	○	×
ニケツ	×	×	○	○	×
コクる	×	○	×	×	×
パクる	×	×	○	×	×
チョウ	○	×	×	×	×
オールする	×	○	○	×	×
～系	×	×	×	×	○
～的	×	×	×	×	○
～くない?	×	×	×	×	○
やるゼロ	×	○	×	×	×
～て感じ	×	×	×	×	○
～みたいな	×	×	×	×	○
とか	×	×	×	×	○
オニ	○	×	×	○	×
うざい	×	○	×	×	×
きもい	×	○	×	×	×
ハブる	×	○	○	×	×

表4 若者ことばの特性

(○はその特性があることを, ×は無いことを示す。)

しかし、米川の指摘する若者語の特性は、その言語形式に備わった特性ではあっても、必ずしもその使用／不使用を決定する要因とは考えにくい。これは後述の使用率を見ればすぐにわかる(3.1参照)。すなわち、ある形式にある種の特性が備わっていることがすぐさまその語形の採用と使用の広がりの意味するわけではない。そこには改新形をどう受けとめるかという心的態度や新語・新用法の定着を支える何らかの理由があるはずである。改新形の広がりについては、これまでその動機として社会的威信や社会ネットワークなどが取り上げられてきた。しかしながら、構造的な概念である社会ネットワークは別としても、改新形の使用はおもに社会的威信と結びつけて論じられることが多かった(cf. Milroy 1987)。男性や労働者階層の vernacular (俗口語) 使用の動機としてしばしば言及される潜在的威信も、いわゆる「(不良的)カッコよさ」の類の解説にとどまっており、その記述は非常に平面的な印象を受ける。しかし、改新

形の採用と拡散はそれほど単純なものなのだろうか。この点をより立体的にとらえるために、本稿ではこの18の形式については、知識、使用に加えて、18の評価語をあげてその意識もたずね、これらの語形・用法に対する回答者の評価を検討することにした。意識調査の結果に使用／不使用の選好を決定する要因が多面的に見いだせるのではないかと考えたためである。この語群をグループⅡと呼ぶことにする。

ただし、今回取り上げた18形式の中で「とか」は辻（1999）の言ういわゆる「とか弁」（たとえば、「天文館とか行って、映画とか見ない？」）に関して質問をしたつもりだったが、調査者側の意図がうまく伝わらなかったようで、他の調査項目とくらべる回答パターンが極端に異なっていた。たぶん、標準語用法の「とか」と区別がつかなかったものと思われるので、今回の分析からは除外した。

それでは以下、若者ことばへの言語意識から若者ことばの使用を裏で支える要因について検討を進める。

### 3. 言語意識から見た若者ことばのイメージ

#### 3.1 若者ことばの知識度と使用度の相関

最初に、語形・用法の知識度と使用度の関係から考察する。表5、6は語群ごとの知識度と使用度の結果である。表5の語形は使用度により4つのグループに下位分類している。また、表6は言語意識の点から5つに分類しているが、これについては次小節で述べる。

まず、全体に見られる傾向を表5を中心に述べておきたい。IAの5つの語形は、「タメ」を除けば既存の意味を拡張して用いているものである。この意味の拡張は、既存の意味を若者の感性に合うものにするため、すなわち、代替の表現ではその感覚はうまく伝えられないために起きたと考えられる。この点、IBの語形である「ワンギリ」も同様のことが言えるだろう。また、「はずい」、「むずい」、「うざい」など「短縮語幹+イ」の短縮型形容詞は、「きしよい」、

語群	語形・用法	知識度(%)	使用度(%)	グループ 平均 知識度(%)	グループ 平均 使用度(%)
I A	かぶる	98.3	89.4	99.2	91.0
	キレる	100	91.6		
	タメ	98.9	85.6		
	はまる	100	98.3		
	へこむ	98.9	89.9		
I B	はずい	95	55.3	94.2	57.9
	むずい	98.9	60.3		
	ワンギリ	88.8	58.1		
I C	おつ	57.5	31.3	82.9	38.9
	おっは一	97.8	47.5		
	きしよい	88.8	35.8		
	よさげ	75.4	42.5		
	入ってる	95	37.4		
I D	イケメン	84.4	8.9	52.5	11.7
	コピる	53.1	10.6		
	ちょつき	31.1	10.1		
	バビッた	41.9	5		
	バリサン	53.1	15.6		
	ブッチする	51.4	20.1		
平均	79.4	47.0			

表5 調査語形・用法の知識度と使用度  
(グループ I)

語群	語形・用法	知識度(%)	使用度(%)	グループ 平均 知識度(%)	グループ 平均 使用度(%)
II A	超	100	66.9	98.3	74.8
	コクる	98.9	70.4		
	ニケツ	93.3	69.3		
	サムい	99.4	91.1		
	めちゃ	100	76.4		
II B	オールする	79.9	49.2	94.3	48.7
	～系	98.3	43.3		
	～的には	99.4	58.7		
	～くない?	99.4	43.6		
II C	やるゼロ	50.8	27.4	81.3	24.8
	オニ	74.9	20.7		
	～って感じ	100	29.2		
	～みたいな	99.4	21.8		
II D	パクる	100	83.2	99.7	83
	うざい	99.4	82.7		
II E	きもい	98.3	45.5	66.8	27.5
	はぶる	35.2	9.5		
平均		89.8	52.3		

表6 調査語形・用法の知識度と使用度  
(グループ II)

「きもい」などではやや嫌われる傾向にあるものの、生産力が豊かな形式である。省略形を好む若者たちの傾向も後押ししているようで、かなり定着しつつあると見ることができるのではないだろうか。<sup>3</sup> 一方IDにあるのは、やや新奇な感じでいかにも若者語と呼ぶことができそうな語形ばかりがそろっている。たしかに目新しさや感覚性は感じることができるが、その分使用できるかどうかとなると、その「いかにも」という部分がかえってブレーキをかけてあまり使用されないのかもしれない。このように流行語的性格の強いIDの語の多くは、定着することなく使い捨てられていくのではないかと思われる。

この点を知識度と使用度の相関関係の点からさらに検討してみる。グループIは相関係数が0.79、グループIIは0.78とそれぞれ高い相関を見せており、全体的には知識度が高いものほど使用度も高くなる傾向にあると思われる。しかしながら、これはすべての場合に当てはまるわけではない。たとえば、「バビッタ」や「ちょっき」などのように知識度が低い語形・用法が使用されないのは当たり前のことだが、「イケメン」のように知識度は高いのに使用度はかなり低い語形もある。つまり、知っているから使うという単純な関係を若者ことばの全体の使用に想定するわけにはいかないということになる。この点、集団語としての若者ことばの特性からは次のようなことが言えると思われる。上述のようにIDに代表される語形は流行語的性格が非常に強い。しかしながら、若者ことばのレジスターである「仲間うち」には集団内の規範が存在し、どのような流行語も受け入れが可能なわけではない。とすると、集団に容認されない新語・新用法は使用するのはむずかしいということになる。IDで挙げた語形は、異なる規範を持つ回答者集団ではもっと受け入れられる可能性もあるかもしれないが、今回の調査では積極的に受け入れられているものとは言えない。<sup>4</sup> そうすると、ここでの結論は場当たりのものに思われるかもしれないが、

<sup>3</sup> この2語は、形式そのものよりも、「気持ちわるさ」という意味の方に対しての嫌悪感が強いためにさけられるのかもしれない。

<sup>4</sup> もちろん、話者のパーソナリティが新語形・用法の採用と深く関わるだろうということは、永瀬他(1995)などからもある程度は予測できることである。しかし、集団の規範が新語採用にどのように関わるかという点から述べた考察はない。

後述するように、使用が避けられる語形・用法にはある種の意識が認められるように思われる。では、どのような理由でその使用が動機づけられるのかを探るために、グループBの語形・用法に関する言語意識調査の結果を検討する。

### 3.2 若者ことばの言語意識

調査では各語形・用法につき、以下18項目の言語意識が求められた。これらの評価語への回答をもとにCAによりそれぞれの言語項目に得点を求めた。ただし、18の評価語のうち、「若者語」と「キツイ」は全体の結果に大きな影響を与えていなかったため、分析の精度を上げるためCAから除外した。そのため、最終的に使用した言語意識は16項目になった。なお、分析には第5次元まで得点を算出したが、各次元の寄与率は表7のとおりである。

おもしろい、ノリがいい、軽薄、ダサイ、新鮮、不快、インパクトある、遊び心ある、使っていて楽しい、表現力がある、流行語、乱れた日本語、使いやすい、カッコいい、仲間内のことば、キツイ、若者語

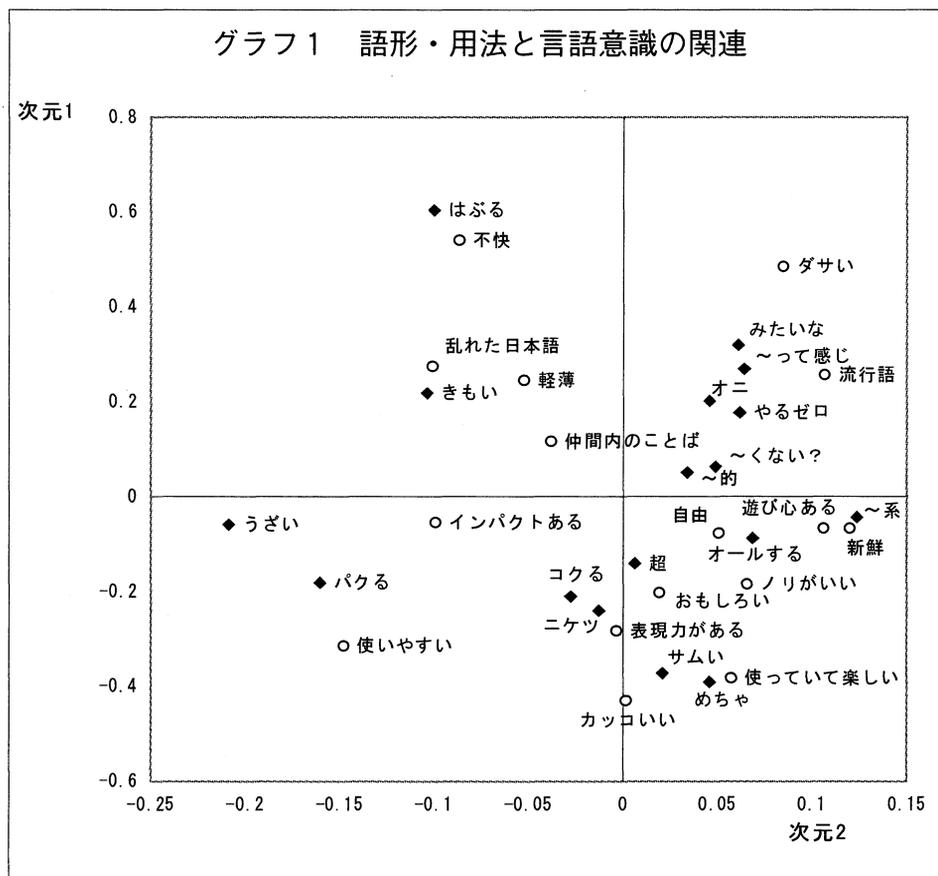
次元	1	2	3	4	5
寄与率(%)	73.18	8.36	7.24	4.52	2.25

表7 CAによる各次元の寄与率

グラフ1は、CAの結果から若者ことばの語形・用法と言語意識をその得点によって次元1と次元2上に表したものである。CAでは回答が類似した傾向にある項目が近くに配置されるので、グラフ上で近い位置にある語形・用法、および各言語意識は関連性が高いと解釈することができる。同様に、語形・用法と意識であっても近くに位置する項目は関連性が高いと解釈される。この言語項目間の距離から、グループIIの語形・用法を5つのグループに分類したものが表6の下位グループである。表6を見ると、グループごとの知識度は「やるゼロ」と「はぶる」を除き、ほとんどの項目で75%~100%とかなりの高率である。しかしながら、グループIの語形と同様、使用度の点からは各下位グ

ループ間で大きな差が見られる。ここでも知っているのに使用しない語形・用法があるということがわかる。

言語意識もプロットされたグラフ1を見ると、どの語形・用法がどの意識と近い関係にあるかがわかる。たとえば「サムい」は、「ギャグが失敗したため、その場に何とも言えないうすら寒い雰囲気が生じた」というイメージが喚起されやすいのか、若者ことばに対する肯定的評価の中でも特に「使うことの楽しさ」と関連が強い。また、「コクる」や「ニケツ」は「表現力がある」と「おもしろい」と近く、表4で述べた若者ことばの特性の「省略」や「イメージ喚起」に対する評価が認められる。一方「きもい」と「はぶる」などは、どちらも語形の「省略」により作られているが、「ノリの良さ」や「自由さ」、「おもしろさ」といった評価よりも「ことばの乱れ」や「不快感」と近い関係にある。これら両者の評価から、若者ことばの特徴にはいつでも同じ評価が下されるわけではないことがわかる。また、「うざい」や「パクる」には「乱れ」の意識



が感じられるかもしれないが、むしろ代替の表現が見つげにくいいためか、その「使いやすさ」や「インパクトの強さ」といった実効的評価が高い。最後に、「～みたいな」や「～って感じ」などはマスコミでギャングロ女子高生のことばの典型として取り上げられるためか、「流行語的」という意識が強く、「ことばの乱れ」や「ダサイ」、「軽薄」といった評価とも少なからず関連が見られるようである。

さて、意識項目を表6のグループに対応させたものが表8である。このようにして見ると、実効性重視のⅡDやノリ重視のⅡAは使用率が高いことから、これらのグループに関連のある意識（すなわち、「使いやすい」、「インパクトある」、「ノリがいい」、「おもしろい」、「表現力ある」、「使っていて楽しい」、「カッコいい」）があると、若者ことばの使用は促進されると考えられる。逆に、ⅡCやⅡDのように否定的な意識（「不快」、「乱れた日本語」、「軽薄」、「ダサイ」、「流行語」など）が喚起される語形・用法は、どちらかと言えば使用されにくい傾向にあると言える。

グループ	意識から読みとれるグループのおもな特性	具体的語形・用法	平均使用率 (%)
ⅡA	楽しさ、おもしろさに加え、会話のノリや表現力が重視される	超、コクする、ニケツ、サムい、めっちゃ	74.8
ⅡB	新鮮さ、自由さが感じられ、ことば遊びの要素も強い	オールする、一系、一的、一くない	48.7
ⅡC	流行語とみなされているが、ダサイ、軽薄などの否定的意識も関連がある	やるゼロ、オニ、一って感じ、一みたいな	24.8
ⅡD	使いやすさ、インパクト性といった実用性が重視されている	うざい、パくる	83.0
ⅡE	軽薄、ことばの乱れ、不快など否定的評価が強い	きもい、はぶる	27.5

表8 言語項目グループ別意識の分類

### 3.3 次元からの検討

前小節の結果は、肯定的に評価されるものは使用率が高く、否定的な評価を受けるものは使用率が低い傾向にあるという、至極当然の内容である。このような結果は、CAのように従属変数を持たない多変量解析では、しばしば一番

大きな説明力を持つ次元（この場合は次元1）として見られるものである（表7の寄与率を参照）。しかしながら、その他の次元で表される要因も、次元1ほどの説明力はないとしても、若者ことばの使用に関わっている可能性はある。そこで、本小節では各次元における意識項目の得点を検討し、各次元が表す要因の特定を行い、そののち重回帰分析でこれらの次元が若者ことばの使用を予測する要因として妥当なモデルを提供してくれるかどうかを検討する。

表9は次元ごとにCAによる意識項目の得点を表したものである。得点はマイナスからプラスへ得点の大きさにしたがって並べられている。この得点を検討することで、各次元が意味する要因を考えてみたい。各次元にはそれぞれ表9に挙げたような意味づけを行うことができると思われる。次元1は、前小節で述べた「(肯定的・否定的) 評価」と考えることができる。次元2では、マイナス方向に使いやすさ、ことばの乱れ、インパクト性、不快さといった肯定・否定の評価が入り交じって現れ、一方プラス方向では新鮮さ、流行性、遊戯性といった意識が見られる。語形の側から検討してみると、たとえば、マイナス方向に現れるのは「うざい」や「パクる」であり、一番強い意識は使いやすさなのだろうが、同時にそこにはことばの乱れ、不快さなども感じられていると思われる。このように、この次元では語形・用法に認められる肯定・否定の入り交じった評価が現れているので、その意味では「語形・用法の持つ性質」が表されていると考えられる。次元3では、新鮮さ、カッコよさ、インパクトなどの「目新しさ」に関わる評価語がマイナス方向に、軽薄さ、使いやすさ、ノリなど「会話の促進」と結びついた評価語がプラス方向に見られ、新しさを求める、またはノリを求めるという「若者ことばを使用する動機」を意味すると考えられる。また次元4は、楽しさ、おもしろさと新しさ、流行性、カッコよさなどが両端に見られるので、一方には楽しさなどの実効性、もう一方には新鮮さ、流行語性などの象徴性が現れていると考えられる。言いかえれば、実効性と象徴性というかなり質の異なる方向性が見られるので、この次元は「志向性」を表していると思われる。最後に次元5は、流行語的で不快な感じもするが表現力の豊かな「～的」、「超」、「～系」が一方に、またノリがよく遊び心が

あり仲間うちのことばとして連帯感を強める働きがあると推測される「パくる」、  
「～くない?」、 「ニケツ」などがもう一方に見られる。つまりこの次元には、  
自分たちの気持ちが率直にかつ鮮やかに相手に伝えられる「表現性」と仲間内  
の心理的結びつきを強める「連帯機能」が表れているように思われ、若者こと  
ばの使用による「効果」を意味するものと考えられる。

(次元1) 評価		(次元2) 語形・用法の性質		(次元3) 使用動機		(次元4) 志向性		(次元5) 若者ことばの効果	
カッコいい	-0.430	使いやすい	-0.148	新鮮	-0.189	新鮮	-0.138	仲間内のことば	-0.090
使っていて楽しい	-0.383	乱れた日本語	-0.101	カッコいい	-0.137	使いやすい	-0.076	遊び心ある	-0.045
使いやすい	-0.314	インパクトある	-0.099	インパクトある	-0.105	流行語	-0.074	ノリがいい	-0.030
表現力がある	-0.282	不快	-0.086	仲間内のことば	-0.068	カッコいい	-0.067	カッコいい	-0.012
おもしろい	-0.202	軽薄	-0.052	おもしろい	-0.063	自由	-0.046	軽薄	-0.011
ノリがいい	-0.185	仲間内のことば	-0.038	乱れた日本語	-0.061	乱れた日本語	-0.031	使いやすい	-0.003
自由	-0.077	表現力がある	-0.003	表現力がある	-0.053	表現力がある	-0.015	新鮮	-0.001
遊び心ある	-0.066	カッコいい	0.002	流行語	-0.001	軽薄	-0.012	乱れた日本語	-0.001
新鮮	-0.066	おもしろい	0.019	使っていて楽しい	0.020	遊び心ある	-0.006	おもしろい	0.004
インパクトある	-0.055	自由	0.051	遊び心ある	0.023	仲間内のことば	0.022	自由	0.013
仲間内のことば	0.116	使っていて楽しい	0.058	ダサイ	0.028	ノリがいい	0.053	ダサイ	0.023
軽薄	0.245	ノリがいい	0.066	不快	0.064	インパクトある	0.062	インパクトある	0.037
流行語	0.257	ダサイ	0.085	自由	0.086	ダサイ	0.075	使っていて楽しい	0.041
乱れた日本語	0.275	遊び心ある	0.106	ノリがいい	0.090	不快	0.076	流行語	0.043
ダサイ	0.485	流行語	0.107	使いやすい	0.094	おもしろい	0.093	不快	0.061
不快	0.540	新鮮	0.120	軽薄	0.121	使っていて楽しい	0.120	表現力がある	0.095

表9 CAによる各意識項目の得点

このような意味づけが可能な次元に若者ことばの語形・用法が位置づけられて  
いるわけだが、そうすると次に問題となるのは、これらの次元が持つ意味は、  
若者ことばの使用とどのように関わってくるかという点である。この点を探る  
ために、若者ことばの各語形・用法にCAで与えられた各次元の得点から、そ  
の語形・用法の使用度が予測できるかどうかを重回帰分析にかけて検討した。  
分析に使用した各次元別得点と使用度数は表10に、その結果は表11の通りであ  
る。

ステップワイズ法による重回帰分析の結果、独立変数投入の確率が5%の場  
合は次元1, 2, 3, 5の4つの次元が、1%の場合は次元1, 2, 3の3つ  
の次元が使用度数の予測に役立つことが示唆された。つまり、「若者ことばへ

語形・用法	次元1	次元2	次元3	次元4	次元5	使用度数
～的	0.051	0.034	0.157	-0.151	0.068	105
～って感じ	0.270	0.064	0.131	0.041	-0.023	52
みたいな	0.320	0.061	0.116	0.063	-0.034	39
～系	-0.043	0.124	-0.043	-0.121	0.043	77
～くない	0.064	0.049	0.041	0.028	-0.066	78
パクる	-0.181	-0.160	0.051	-0.052	-0.071	149
はぶる	0.604	-0.100	-0.096	-0.020	0.027	17
ニケツ	-0.240	-0.013	-0.040	0.009	-0.051	124
やるゼロ	0.177	0.062	-0.088	-0.008	-0.020	49
コクる	-0.210	-0.028	-0.022	-0.042	-0.042	126
サムい	-0.372	0.021	-0.006	0.099	0.034	163
オールする	-0.088	0.069	-0.091	-0.067	-0.042	88
うざい	-0.059	-0.209	0.000	-0.013	0.031	148
きもい	0.219	-0.103	-0.005	0.049	0.040	81
超	-0.141	0.006	0.044	0.043	0.067	119
オニ	0.202	0.046	-0.152	0.049	0.019	37
めちゃ	-0.391	0.046	-0.001	0.037	0.028	136

表10 言語項目の次元別得点を使用度数

	R <sup>2</sup>	F 値
次元1 + 2 + 3 + 5	0.980	193.974**

	標準化回帰係数	t 値
次元1	-0.902	-25.283**
次元2	-0.381	-10.702**
次元3	0.178	4.986**
次元5	0.080	2.239*

\*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01

表11 重回帰分析結果（変数投入確率5%のステップワイズ法による）

の評価]、「語形・用法の持つ性質」、「若者ことばを使用する際の動機」、場合によっては「若者ことばの使用による効果」が若者ことばの使用度に影響を与える要因ではないかと考えられる。この中で、次元1の「評価」と次元2の「性質」は、CAのような分析を行わなくても常識的に考えてことばの使用に影響を与えるものとある程度は予想することができるものである。しかしなが

ら、次元3の「使用動機」、さらには次元5の「効果」が若者ことばの使用に影響を与える要因の可能性があると示唆する結果は、これまでに統計的検証などが行われていなかった米川（1998）の主張が妥当なものであることの裏付けになり得るかもしれない。

#### 4. おわりに

以上の考察から、若者ことば使用に関わる要因には、

- a. 語形・用法に対する評価
- b. 語形・用法の性質
- c. 使用の動機
- d. 使用による効果

の4つが認められたが、前者2つは語形・用法そのものに関わるもの、後者2つはその使用に関わるものである。一般に改新形の使用にはaやbが強く働いていることが予想され、表7の寄与率もそれを裏付けているわけだが、使用に関わる要因の関与が示唆される結果になったことは興味深い。すなわち、若者ことばの使用は語形・用法の属性だけでなく、使用者が達成しようとするいくつかの目的によって複合的に動機づけられたものと考えることができる。本稿の分析の中でふれた「会話促進」、「目新しさ」、「連帯感」などの使用目的は、米川（1998）があげる若者語の機能と完全に一致しているわけではない。<sup>5</sup> これは今回の分析ではこれらのすべての機能を網羅して意識項目の評価語を設定したわけではないからだが、そのためここでは米川による機能の分類の妥当性を評価することはできない。しかし、分析の結果からは、「ノリ」（すなわち会

---

<sup>5</sup> 米川（1998：18-25）が挙げる若者語の機能は以下の7つである。

娯楽機能 会話促進機能 連帯機能 イメージ伝達機能 隠蔽機能 緩衝機能  
浄化機能

話促進的要素)や「目新しさ」を求める動機や「連帯感」という効果を求める傾向は見られたので、その意味では米川の主張は部分的にだが認めることができると思われる。

もちろん、ひとつの語形・用法はひとつの目的にしか適用できないというわけではなく、複数の目的を持つことの方が多いただろう。いずれにしても、「目新しさ」や「会話の促進」などの何らかの目的があることが若者ことばの使用に関連があると思われる。しかし、ある形式がたとえば「目新しさ」という目的にかなわなくなった場合はどうだろうか。その場合、その形式は廃用になり、最終的には流行語というラベルを貼られることになるかもしれない。一方、「うざい」などの「短縮語幹+イ」型形容詞や「～的」などの生産性の高いテンプレート的表現は、若者の言語体系の一部として組み込まれ、新しい日本語のシステムを構築していく可能性もあるだろう。このように、現れては消えるものが多数の新語・流行語の中から若者の文法の一部として組み込まれて将来まで存続し、時にはその勢力を広げていくものもある。現在の新語・流行語が将来生き残っていかどうかはその形式そのものに備わる性質によるところが大きいと思われるが、どのような形式が今後生き残っていくかは今しばらくの時間を経て確認できることである。「ら抜きことば」のような動詞の活用体系を整えるという強力な言語内的要因による体系の変容とは違うが、生き残った語形・用法にはどのような共通点があるのか、なぜそれが定着し使われ続けるかの理由については、今後観察する用例数を増やして検討しなければならない。

## 注

本稿の執筆にあたっては、次のような作業の分担をした。データ収集は太田と牧瀬が共同で行った。データの整理は牧瀬が、論文の執筆は太田が担当した。内容に関しては、「2. 考察の進め方と調査の概要」で一部牧瀬(2001)を下敷きにしているが、分析に関しては太田が新たに行ったものであり、ほとんどが本稿独自のものを付しておく。

### 参考文献

- 井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』 岩波書店
- 陣内正敬 (1998) 『日本語の現在』 アルク
- 辻大介 (1999) 「若者語と対人関係」『東京大学社会情報研究所紀要』 57号, pp.17-42.
- 永瀬治郎・岡隆・池田理恵子 (1995) 「集団語の知識・使用と言語意識・パーソナリティの関連について」『専修国文』 第56号 pp.1-10.
- 永瀬治郎 (1996) 「キャンパス言葉使用とその要因—パス解析を使って—」『言語学林』 pp.985-93. 三省堂
- 牧瀬那生 (2001) 『若者ことばのメディア性』 平成12年度 鹿児島大学法文学部卒業論文
- 米川明彦 (1998) 『若者語を科学する』 明治書院
- Milroy, L. (1987) *Observing and analyzing natural language*. Oxford: Blackwell.